

電子複写不可

沖繩作戦の観察(主)

防衛研究所図書館



沖繩作戦の要略

(主務者第2次案)



修知

目 次

- 第 1 大本營及び 10HA の 3 2 A に対する統帥指導
- 第 2 3 2 A の統帥指導
- 第 3 各兵団及び主要部隊の戦斗
- 第 4 国民の協力、戦斗参加及び避難行動
- 第 5 米軍の作戦戦斗及び民政

本資料は今次研究の主要研究項目に基く問題点に関する主務者の観察を整理したものであり、今後における研究、調査により補備完成することを前提としたものである。なお文中「Ⅰ巻」、
「Ⅱ巻」、
「付図」、
「付表」等の記載はそれぞれ「32Aを中心とする日本軍の作戦（第1巻、第2巻）」及びその付図、付表を言ひ。

沖縄作戦の観察

(主務者第2次案)

第1 大本營及び10HAの32
Aに対する統帥・指揮

目 次

1	作戦目的-----	1-1
a	比島決戦の惹起及び9Dの転用に伴う 南西諸島方面に対する作戦目的確立の 時期-----	1-1
b	昭和20年1月20日に大本営が策定 した新作戰計画及び2月3日108Aに 与えた任務における南西諸島方面の作戦 目的-----	1-7
c	大本営陸海軍部間における作戦目的の 相違-----	1-13
2	充当戦力と任務の付与-----	1-17
a	9Dの抽出と32Aの任務との関係-----	1-17
b	84Dの派遣中止と32Aの新任務と の関係-----	1-17
c	後方戦力の付与-----	1-21
d	再度にわたる指揮系統の変更、9Dの 抽出及び84Dの派遣中止が32Aに及 ぼした影響-----	1-23
3	作戦思想特に対上陸作戦における陸上戦 力と航空戦力との関係-----	1-26
a	10号作戦準備以来の航空要塞思想 (島嶼防禦における地上軍の地位)-----	1-26
b	天号作戦計画における使用航空兵力と 沖縄本島陸上兵力との関係-----	1-30
c	84Dの派遣中止後、32Aの現有兵 力・北中飛行場の価値及び本土決戦準備 との関連において32Aに期待し得る限 度-----	1-31

4 作戦思想等に関する32Aとの調整	
及び作戦指図	----- 1-34
a 9D抽出後における32Aの新作	
戦構想及び配備に対する10HAの	
指図	----- 1-34
b 同上に関する大本營の実情把握の	
努力	----- 1-37
c 敵の上陸直後における大本營及び	
10HAの32Aに対する攻勢要求	
特に32Aの実情との関係及び今後	
の作戦に及ぼした影響	----- 1-39

1 作戦目的について

- a 比島決戦の惹起及び9Dの転用に伴う南西諸島方面に対する作戦目的確立の時期(付表第1その1)

(1) 時期的関係

昭・19・7・11に大本營が策定した捷2号作戦準備における南西諸島方面特に沖縄本島の作戦目的は、捷1号作戦準備地域たる比島と刺を揃べて米軍主力の来攻に応じ国軍の決戦を行うにあつたが、その後米軍のレイテ上陸に伴い、10・18決戦は捷1号(比島)方面に発動され、又これに関連し11月下旬、9Dが沖縄から台湾に転用される等の情勢の変化があつたが、大本營は以後における沖縄方面の作戦に関しては格別の指導を行わなかつた。しかし、レイテ決戦が12月下旬愈々挫折するに及び大本營は急遽新作戦構想を検討し、かくてようやく20・1・20(比島決戦惹起後3ヶ月、9D抽出及び32Aの新作戦計画策定後2ヶ月、レイテ決戦中止後1ヶ月)に至り本土を中心とする新作戦計画の一案として戦略持久的性格の下に敵の空、海基地推進破壊を主眼とする沖縄方面の新作戦目的が確立されることになつたのである。(大本營が真に本土作戦中心の肚を決めたのは12月末であつた。)

(2) 問題となる事項

9 D の抽出という事態がなければ上記のような時期的関係も或は大なる問題を生じなかつたかと思われるが、9 D の転用に伴い現地軍たる 32 A が 11 月下旬既に自主的に新戦計画を策定し、これに基づく新配備に移行してから 2 ヶ月を経過した後大本營の新戦目的が決定され、かつ、その内容が 32 A の戦方針及び配備と必ずしも合致しなかつた所に最大の問題があり、これがため本戦の全般を通じて現地軍と上級司令部間に意志の疎通を欠き統帥の脈絡一貫性が失われるに至つたのではないかと考えられる。

(3) 捷 2 号作戦準備の前提条件の変化及び比島決戦の性格との関係についての考察

- (a) 南西諸島方面に米軍主力が来攻した場合に決戦を行う捷 2 号作戦準備構想の大前提となつた航空・海上戦力は既に 10 月下旬以来捷 1 号（比島）決戦方面に集中され、かつこれに関連し 11 月下旬 9 D も沖縄から台湾に転用されたので客観的かつ理論的に視れば、大本營としては少くも 9 D の後詰を早急に実現しない限り、南西諸島方面特に沖縄本島の作戦準備を当然新たな構想の下に速かに再出発すべきではなかつたかと思われる。
- (b) 又米軍のレイテ上陸とともに発動された比島（捷 1 号）決戦は、いわゆる戦争指導上の最終決戦ではなかつたので、大本營としては同決戦の惹起とともに若しこれが蹙退した場合にも直ちに対処し得るよう、次期作戦（本土又は南西諸島方面を中心とする）の構想を早期に概定し 10 HA（32 A）に適時行動の準備を与える必要があつたのではないかと理論的には一応考えられる。

- (A) 大本營の南西諸島方面に対する新作戰目的の検討が速かに行われなかつた原因

(a) 戦争指導との関係

ガ島以来の全般戦局における受動の態勢が、愈々追いつめられた状態となり、特に比島を喪えば南方資源地帯と本土との交通を遮断されることにより、従来とは全然趣きを異にする日・満・支特に本土を中心とする戦争指導方針の大転換となるのが、このような戦争指導方針の大変更は容易に行われるものではないのでこれに伴う作戰方針の変更は当然時日を要したものと考えられる。

(b) 決戦力たる航空戦力再建の見直しとの関係

比島決戦は12月まで続行され、航空兵力の大部はこれに投入されて消耗しつつあったので、以後における航空戦力再建の見直しについて、用途を立てるために相当の時日を必要としたものと思われる。

(c) 防務作戦における当面の作戰指導と以後の作戦のための先行計画との関係

○ 比島決戦は最終決戦でこそなかつたが、国力の7~8割を投入した米軍の反攻開始以来の大決戦であり、又比島を喪えば開戦の目的を喪うような結果をも招来することになるので、陸海中央部ともその指導に忙殺されて他を顧みる余裕がなかつたことは無

理からぬことと思われる。

○ 又このように追いつめられた至難な戦局の下に大東亜全域に及ぶ広大な戦面の作戦を主宰する大本營の幕僚組織において当面の作戦指導に任ずるグループと先行計画の研究策定に任ずるグループとを明確に区分するだけの陣容が十分でなかつたことも、次期作戦の計画策定が必ずしも円滑に行かなかつた有力な一原因をなしたものと観察される。

(d) 沖縄に対する9Dの後詰との関係

最も直接的な原因としては、大本營が9Dの後詰を本土から送ることを一応胸算していたことにより、沖縄については容易に旧態勢に復備させ得ると考えていたので必ずしも作戦目的、任務を早急に更改を要しないであろうとの見解であつたことである。しかし、9Dの後詰についての真の肚は未だ決つておらず、従つて現地軍にもこれを確約し得なかつた所に問題があると思われる。

(5) 参考所見

- (a) 上級司令部特に最高統帥部が助勢的戦局において、基方面の作戦を指導しつつ情勢の変転に応じ、機を失せず次期作戦のための新しい作戦目的を確立（已むを得ざるも概定）し、現地軍に適時行動の準備を与えることは、難事中の難事である。しかし、この機を失すれば、現地軍の独断的行動を許容せざるを得なくなり、後日これが自巳の意図に合わない場合、調整に苦しみ統帥の一貫性を期し得ない結果となり易い。
- (b) この間に処して次期作戦への移行を円滑にするための有方な手段として当面の作戦指導に専念する基係グループと先行してじ後の作戦の計画に任ずる基係グループを区分して編成することが是非必要ではないかと考えられる。

D 昭和20年1月20日に大本營が策定した新作戰計画及び同2月3日、10H.A.に与えた新任務における南西諸島方面の作戰目的（I巻 145～148P 参照）

(1) 南西諸島方面全般の作戰目的が決戦か持久かの問題について

(a) 新作戰計画の基本構想に関する陸軍側の真意は、本土における最終決戦を準備するため南西諸島等の外圍地帯において戦略的持久作戰を行うにあり、南西諸島方面における作戰目的の本質は持久にあつたものと考えられる。

而してこれがため航空作戰は決戦的に行い基地地上軍の戦斗と相俟つて米軍の人的戦力に大損害を与え、その空・海基地の推進を阻止しながら本土の決戦準備を速急に完成することを狙いとされていたものと推察される。

(b) しかし、新作戰計画及び10H.A.に与えられた命令においては、「南西諸島の確保」或は「来攻する敵の撃滅」等の決戦的に解せられる表現と、「空、海基地の推進を破挫し、本土、朝鮮・支那沿岸に対する敵の来攻を封殺」或は「国土特に本土を確保」等の本土作戰のための持久的に解せられる表現が混用されており、前(向)項において述べたその本質が必ずしも明確に表現されていない感があるように見受けられる。

(c) 本件については10H.A.は、本作戰目的をどちらかといえば決戦的に解し、本土作戰のため時間の余裕を

得ることをあまり重視しなかつたのに反し、32Aはこれを持久的に解し、両者の間に相当の思想の相違を生じた。

(d) 又本計画は陸、海共通の最初の作戦計画であつたが海軍側は以後決戦思想に移すに至つた。

(2) 全般作戦目的が必ずしも明確に表現されなかつた原因

(a) 後述するような決戦思想を有する海軍側との妥協の所産であること

(b) 航空作戦は決戦的に行われる計画であり、しかもその基地配置は沖縄に対し絶好の地位にあつたので、陸軍側としても理想としては、来攻する敵船団を洋上に撃滅する希望を棄て切れないうちにあつたと思われ、必ずしも持久一本にはつきり割り切れないうちにあつたのではなからうか。

(c) 沖縄及び台湾方面は従来の作戦地域と異なり、国土における作戦である特殊の性格上、みすみすこれを棄てることを暗示するような表現は出来ないことも少からず影響しているのではないかと考えられる。

(3) 南西諸島特に沖縄本島における陸上作戦の目的

(a) 沖縄方面の陸上作戦に関する大本營の作戦目的は、主役をなす航空作戦と相俟つて米軍の空、海基地の推進利用を制扼しつつ、敵に大なる損耗を強要し本土作戦作戦のための時間の余裕を得るにあつたと思われるが、航空作戦に寄与することを主眼とし、32Aが考へていた地上軍自体による持久出血については必ずしも第一義的には重視していなかつたように現受けられる。

随つて20.2.3.10H Aに与えた命令において任務達成の爲準備すべき要綱として「敵の空、海基地の推進破壊」と「台湾及び沖縄本島を東支那海方面に対する機略ある航空作戦の拠点たらしめる」ことを要求している。

(b) しかし、現地軍たる32Aは既に2ヶ月前、どちらかといえば航空作戦に対する寄与よりも地上軍自体による持久出血を第一義とした作戦目的を自主的に定め、これに基く配備の変更を終了し、大本營の企図した目的に必ずしも即応し得ない態勢にあつた所に最も重要な問題が潜んでいた。

(4) 陸上作戦目的について大本營と現地軍(32A)両者の間に喰ひ違ひを生ずるに至つた原因

(a) 既述のように9D転用に伴ひ32Aが自主的に作戦目的を変更してから2ヶ月後に大本營の作戦目的が定まり、この間における両者の調整が円滑に行われなかつたこと並びに大本營は9Dの後継を実現することを前提として新作戦計画を策定したことによる所も大であるが、根本的には後述するように両者の包摂する地上作戦と航空作戦との関係についての作戦思想が全く対照的に異なつていたことに起因するものと考察される。

(b) 又大本營が既述のような32Aの作戦方針及び現態勢について必ずしも十分にその現情を把握していなかつた態みがあつたことも大きく影響しているように見受けられる。

(5) 参考所見

(a) 作戦目的の確立と透徹は統帥の根本義であるが、本作戦においては既述のような経緯によつて現地軍と大本営との間に戦略持久の大本においては、一致していたがその具体的目的について相当の食い違いを生じ遂にこれが調整されずして作戦実施に突入した所に最大の悲劇があつた。

而してその原因は前述のような大本営側の先見洞察に関する諸問題による所もとより大なるものがあるが、32A側の9D抽出に処する状況判断及びこれに関連する上級司令部との調整についても非常に問題があり、後者については項を改めて詳細に研究することとする。

(b) 又上級司令部としては、下級兵団の現状に即応し実行可能な作戦目的を与えるために特にその現情の把握等について大なる努力を要するものと考えられる。

(c) 作戦目的の表現(任務の附与)に方りその根柢をなす思想例えば決戦か持久かの趣旨については一点の疑義もないようにすることが必要であり、これが明瞭でない場合、各級司令部との間に恐るべき意志の疎通を欠くことになることが痛感される。

○ 大本営陸海軍部間における作戦目的の相違(予備343~154P及びII巻3~4P参照)

(1) 陸海共通の新作戦計画と海軍側の決戦思想

20.1.20に策定された大本営の新作戦計画は、わが国として初めての陸海共通の計画であつたが、根本的には同床異夢の傾向があり、両者の作戦思想は十分に調整されていなかつた。南西諸島方面に関する陸軍側の狙いは既述のように本土作戦準備のための戦略持久にあつた。

しかし海軍側の狙いは、これとは異り、先づ沖縄において決戦を期すべきであり、本土決戦は真に日むを得ない場合の措置である。その前に未だ沖縄を舞台として極めて有力な終戦処理にも通ずる手が残されており、台湾や破黄島は棄てても沖縄だけは徹底的な戦力を集中してその確保を期すべきであつて、かくすることにより日むを得なくともこれによつて大なる時間の余裕をとり得るとの見解であつた。

即ち沖縄は米軍がわが本土攻略のために必らず取らねばならぬ要地であるが、ルソンや台湾等が面的な広さを持つてゐるのに比し、いわば点に等しい極めて限定された地域であるので、ここにラバウル式の地下要塞を築けばこれに対する有利な航空基地と相俟つて敵の侵攻を挫折し得る公算が大きいので、地上兵力も航空もなし得る限り引き込んで決戦を行ふべきであるとの思想であつた。

尤もこの思想は当初はそれ程熱烈でなかつたが、3月に入り航空兵力の再建の見込しが立つに従い愈々高潮して行つた。これに対し陸軍側は既に海洋島嶼における本格的決戦には自信を喪失し、本土における陸上大兵力による決戦に戦後の期待をかけていたものと思われる。

(2) 両者の作戦目的の相違が後の作戦に及ぼした影響

海軍側（G Ⅱを含む）は、再三沖縄北・中飛行場の確保乃至は強力な制空を陸軍側に対して要求したので、米軍の上陸直後大本営陸軍部が32Aに対して攻勢を要求するに至つた有力な一動機をなしたのではないかと觀察される。

而して航空作戦を主宰すべき地位にあつた海軍の決戦思想は、32Aの地上軍目体による持久を主とした作戦方針及び配備とは全く対照的なものであつたので、沖縄における空地両作戦の指導は、いわばチグハグな思想の下に行われた筈があり、これが作戦に及ぼした影響は至大なものがあつたと思われる。

(3) 陸・海両者の作戦目的が一致しなかつた原因

(a) 両者の立場及び戦力の特質の相違

海軍は既に海上艦隊の大部を喪失し、基地航空戦力のみとなつていた関係もあり、仮りに沖縄決戦で失敗しても比較的容易に本土作戦に転移出来る立場にあつた。即ち極端に云えば航空機の生産とパイロットの養成が出来れば再び本土においても戦い得る状態にあつた。これに反し陸軍側は本土作戦のため龐大な兵力の動員・輸送・展開・築城及び軍需品の輸送集積を必要とし、これがためには、半年以上の日時を要する状態にあつた。

(b) 戦略の相違

海軍はその戦力の特質上、伝統的に攻勢、速決決戦の思想であり、戦略持久的な兵力運用は陸軍独特のものではなかつたかと考えられる。

(c) 航空の大規模な投入については一致していたこと。本作戦の主役をなす航空については、陸軍側も大規模な投入を考えており、又当初B4Dの増派も予期されていたので、形の上では両者の意向は一応一致したような状態にあつた。

(d) 陸軍側も海軍の立場を考えて強いて調整の努力を行わなかつた。

(e) 既述のように大本営の新作戦計画が、決戦・持久何れとも解釈されるような表現であつたことも海軍側の独走を許した一因をなしているように見受けられる。

(4) 参考所見

- (a) 作戦目的に関する前各項を通観すれば、沖縄作戦の目的は其の意味においては確立されていなかつたとも謂い得るのではなからうか。即ち陸、海中央部及び現地軍においては夫々確立されていたが、これが脈絡一貫していなかつたとの感を深くする。
- (b) 以上のように南西諸島方面の作戦目的だけを採り上げればその確立の時機・内容及び陸・海軍間の食い違い等について諸點の問題点があつたが、当時の最終段階に近く追いつめられた最悪の状況下において、大東亜全域にわたる広大な戦面について従来とは全然構想を異にする日・美支持に本土を中核とする新作戦計画を比島決戦中止後1ヶ月で策定し、戦線を再建した大本營の指導は敬服に値するものがあり、その間における苦心努力は正に並々ならぬものがあつたものと推察される。
- (c) 結論的には中央における統合作戦機構確立の要が痛感されるが本件についてはあえて意見を要しないであらう。

2 充当戦力と任務の附与

a 9Dの抽出と32Aの任務との関係 (I巻-P116)

(1) 大本營と32Aの考え方の相違

大本營は比島(捷1号)決戦が惹起し、かつ、9Dを沖縄から抽出転用した後においても、なお32Aの捷2号作戦準備における決戦任務が生きていると考えていたようであるが、これに反し現地軍たる32Aは、既述のような情勢の変化に鑑み、捷2号作戦準備計画に基づく決戦任務は本質的に解消され、編成当初に与えられた南西諸島の防衛という巾の広い基本任務だけが生きるとの解釈の下に作戦計画及び配備を変更するに至つた。

(2) 本件についての考察

作戦目的の項において述べた趣旨と概ね同様であるのでこれを省略する。

b 84Dの派遣中止と32Aの新任務との関係

(1) 19.1.20決定の大本營の新作戦計画の前提 (I巻147P)

19.1.20決定の大本營の新作戦計画は、南西諸島方面(沖縄)に関する限り明らかに84Dの増派を前提として策定されており、要するにこの当時大本營は鋭意84

Dの増派の準備を行い、1-22にはこれに関する内奏を終り、32Aにもこの旨内報した程であつた。

注(1) 大本營の新作戦計画のうち「国土要域」の作戦指導の準備の項において「千島、小笠原・南西諸島及び台湾においては、予め所要の兵力を増加して作戦準備を整え、かつ機を失せず所要航空戦力を集中増加して敵を撃滅する態勢をとる」と示されている。

注(2) 84D派遣中止の経緯の詳細については「付録」沖繩作戦に関する大本營陸海軍部の作戦指導に関する補備資料参照

(2) 大本營の新作戦計画と10HA(32A)に与えられた新任務との関係-I巻P148及びP158~160)

しかし、新作戦計画の前提となつた沖繩に対する84Dの増派は内定の空1-23に突如取り止めとなつたが、2-3、大本營が10HAに与えた新任務(32Aに対しても殆んど同文の任務を10HAより附与)は、必ずしも84Dの派遣中止に拘わりなく与えられたように見受けられる。

即ち任務達成のための準備すべき要綱として「敵の空母基地の推進破壊」と「沖繩本島を東支那海周辺における機略ある航空作戦の拠点たらしめる」ことを示されており、これがためには実質的に殆んど機2号準備当時と同様の兵力と構想を以て対処する必要があつたものと考えられる。

(3) 32Aの現情との関係についての考察

(a) 一方既述のように32Aは、既に19年11月下旬9D転用以来、地上軍自体による持久を主とした作戦構想及び配属に切り換えていたので、10Dの増派がない限り新任務を十分に遂成するだけの戦力と態勢に欠けていた状態にあり、随つてこの新任務を受領しても大なる感応を示すことなく、「出来ないものは出来ない」との半ば諦観的気分にあつたもののように窺われる。

(b) 大本營としては、全軍の関係を律した新作戦計画及びこれに基づく各軍の新任務を附与したので南西諸島に関する備か10Dの兵力の変動によつて左右される訳には行かなかつたかとも思われるが、次期作戦における最も重要な正面であるので更に沖繩本島における32Aの現配備及び現戦力によつて期待し得る限度について突きつめた検討を行うべきではなかつたかと觀察される。

(4) 参考所見

(a) 上級司令部が予め下級兵団の戦力の限界を至当に判断し、任務に適する戦力を附与し、或はその戦力及び現態勢に適した任務を与えることは一般戦況不利な場合においては極めて困難である。

しかしながら下級兵団に過望の要求を行えば、自ら

命令の専断性を害する結果となり、又下級兵団をして命令に対する必行の気魄を喪失させることになりまい。

- (b) 適正な任務の附与を誤らないためには、下級兵団の実情把握のための絶大な努力と受領者の立場に立つて任務遂成の方法を具体的に突きつめることが必要ではないかと考えられる。

○ 後方戦力の附与

(1) 糧秣について非常な努力により約6~9ヶ月分の集積を完了し、概ね作戦の所要を充たすに十分であつた。

(2) 弾薬は各兵団等が援2号作戦準備における展開の際施行した一会戦分弱(24D-0.8会戦分、62D-0.5会戦分、44B-0.8会戦分、軍直1.0会戦分)のみであつて軍の予備等はなく、戦略持久的地位にある軍としては必ずしも十分でなかつたように見受けられる。(ルソンにおいても0.8~1会戦分であつた)特に、M7は各門200~300発程度で最大発射速度を以てすれば30~40分間で射耗して丁うような状態であつた。

注 しかし、一面において各兵団の輸送力も展開時の船舶輸送等によつて制限されたので、例えば野戦重砲連隊には連・大隊段列がなく、中隊で1会戦分約1,000発を自体で装備していたような状態であり、その機動力は著しく制約されていた。

(3) じ後の作戦に及ぼした影響の一端

実際において32Aが最も悩んだのは、5月4~5日における攻勢により砲兵弾薬の大部を射耗し、じ後は各門300発程度で1日1門について14~15発に制限しても5月末まで続くかどうか疑問視されるようになり、

作戦の弾薬力を失うこととなった。

又6月における喜屋武復帰降地の戦いにおいては、著しい弾薬の不足により空輸等によるその緊急輸送に唯一の期待を托しつつ最後には徒手空拳に近い状態で作戦の終末を迎えるに至った。

(4) 後方集積等が十分に行われなかった原因

根本的には当時における全般的な後方戦力の不足特に本土作戦準備のための莫大な所要量並びに海上輸送の極度の困難性に起因するもので、当時としてはこれ以上を望み得なかつたものと思われる。しかし沖縄の価値に鑑みある程度の重点形成は可能ではなかつたろうかと考えられる。

d 再度にわたる指揮系統の変更、9Dの抽出及び84Dの派遣中止が32Aに及ぼした影響。

(1) 再度にわたる指揮系統の変更

(a) 19.3.22大本営直轄として編成された32Aは、主として本土との関連から5-10(10号作戦準備間)防衛総軍(西部軍)の指揮下に入り、更に捷2号作戦準備の開始に方り7-15台湾との関連が重視されて台湾軍(後の10HA)の指揮下に編入された。

(b) 32Aの指揮系統が再度にわたって変更されたことは中間司令部たる10HAの32Aに対する統帥力を弱め、勢い32Aをして必ずしも進んで10HAの掌握下に入る態度に出でさせない結果を招来したように見受けられる。

(c) 大本営がこのように指揮系統の変更をせざるを得なかつたのは、戦況の推移に応ずる兩西諸島の占める戦略的地位を慎重・冷静に洞察し得なかつたことによるが、当時としてはこれを見究めることは至難であつたものと思われる。

即ち西部軍から更に台湾軍に変更した間にはサイパンの陥落という予期しない事態があつたことに注意を要するものがある。

(2) 9 D の抽出及び B 4 D の派遣中止の及ぼした影響

(a) 9 D の抽出は A 長の意見具申を無視して強行されたので、3 2 A をして上級司令部に潜在的な不信感を抱かせるに至ったことは否み得ない事実であり、又 3 2 A 全将兵の士気に致命的な感作を与え必勝の信念を喪失させる程の影響を与えている。

又 B 4 D の増派が内報された翌日これが中止されたことは、9 D 抽出に伴う上記の感作に愈々拍車をかけた感があつた。

(b) 大本營及び 1 0 H A は 9 D を抽出するに方り、恐らく以上のように深刻な精神的感作を 3 2 A に及ぼすことについては、必ずしも十分に考慮に入れていなかったように見受けられる。

(3) 参考所見

(a) 統帥は血の通つたものであらねばならない。これがため統帥系統の早期確立と、下級兵団の身になつて諸施策を講ずるの要が痛感される。

防務作戦において上級司令部特に最高統帥部が戦況の推移を洞察し、現地軍の指揮系統を確立することは容易でないが指揮系統の変更は中間司令部の統帥力を著しく弱めることを銘肝すべきであらう。

(b) 9 D の抽出及び B 4 D の派遣中止の可否は本作戰における大本營統帥の最も重要な問題であるが、他方面に關する詳細な資料をまたなければ濶かに断じ得ない

ものがある。

しかしこれが根底となる比島決戦後において沖縄の占める利用価値についての遊戯については疑問なしとしない。

(c) 以上のように充當戦力と任務との關係について、9 D 抽出後においては幾多の問題点があつたが、これに先だつて 2 号作戦準備に方り大本營がサイパン陥落直後の極めて困難な状況下において大々的な南西諸島に対する兵力増強を時宜に適し手際よく敢行して作戦の基盤を造成した先見と努力は見落してはならないと考えられる。

3 2 A が後日あれだけの組織的戦闘をなし得た背景にはこのような大本營の並々ならぬ先行準備があつたことを銘記すべきであらう。

3 作戦思想特に対上陸作戦における陸上戦力と航空戦力との
関係

a 10号作戦準備以来の大本營の航空要塞的思想(島嶼防
禦における地上軍の地位)について

(1) 大本營の思想

大本營は南東及び中部太平洋方面作戦における吾い体
験に鑑み、海洋島嶼作戦の補め手を航空戦力に求め、南
西諸島においては10号作戦準備以来主要な島嶼を航空
要塞化して地上軍は、飛行場群を設定、確保して航空作
戦を容易ならしめることを主眼として作戦準備を指導し
た。

捷2号作戦準備においては兵力の増強に伴い、地上軍
も決戦の一翼を担うことになったが、その根本的思想に
は変わりなく、9D抽出以後20.1.20の新作戦計画
及びこれに基づく天号作戦計画においては、この思想は愈
々最高潮に達し、既述のように10日A(32A)の任
務達成の要綱として「敵の空、海基地の推進破壊」とし
台湾及び沖縄を東支那海周辺における航空作戦の拠点た
らしめる」ことを要望した程であった。

(2) 32Aとの思想の対立

しかるに現地軍たる32Aの考え方は「海洋島嶼作戦
において航空は学理的乃至理想としては、大本營のいう

ように決戦兵器であるが、南東及び中部太平洋方面の作戦並びに近くは比島方面の作戦の結果が示しているように、既に決戦戦力たるの実力を喪失しており、かつ、航空作戦はいわゆる本物であつて当てにならないので、地上軍は航空作戦を基礎とし、これを容易にすることを主眼とするのではなく、むしろ地上軍自体による作戦を主眼とすべきであるとの思想に傾き、9Dを抽出されてからは益々この考え方が強くなつていた。

随つて大本營の考え方とは全く対照的であつてこの根本思想の相違が、以後の作戦準備及び作戦指導を通じて両者の間に紛糾を生ずる根本的原因となつたものと觀察される。

(3) 当時における地上軍の地位についての考察

(a) 大本營が太平洋戦面において航空第1主義を採り戦勢挽回の決め手を航空戦力に期待したことは、当時の全般態勢上至当な考えであり、広大な海洋島嶼作戦においてこれ以外に特別の妙手はなかつたのではないかと思われる。又、サイパン・レイテ作戦の失敗後においても航空が逐次実力を喪失し、地上軍の地位が逐次増大しつつあつたことは事実であろうが依然決戦的戦力として作戦の主役たるの地位にあることには変わりなく、特に沖繩方面においては従来と異り、これに対するわが基地配置の優越(特に本土に近い)に鑑み、今度こそ航空に期待される所大なるものがあつたのは当然のことであつたと考えられる。随つてS2Aの考え方のように既に決戦戦力(作戦の主役)たるの地位を

失つたに等しいとは未だ云い得ない状態にあつたのではなからうか。

(b) しかし反面において大本營の思想がやや極端に傾き地上軍独特の使命特にサイパン・比島等で現実に生じた航空作戦不利な場合における地上軍を以てする持久作戦の価値乃至は航空攻勢の支とうとしての地上軍存在の価値をやや看過されていた懸みがあるようにも見受けられ、20.2.3大本營が10日Aに与えた任務の中にも本件については触れられていない。

(c) 当時における地上軍の地位を要約すれば次のように云い得るのではなからうか。

- 決戦の場合—わが航空基地を確保するとともに決戦の一翼として洋上軍艦を免れた敵上陸軍の軍滅
- 持久の場合—航空基地を確保しむを得ざるも敵の使用を制してわが航空作戦を容易ならしめるほか、わが航空作戦不利な場合は地上軍戦力を以てする持久戦の遂行を要する。
- 決戦より持久に転移する場合—上記兩者を併有する。

(4) 大本營がやや極端な航空至上主義に傾いた原因

(a) 従来の太平洋戦線特に南東方面の苦い体験からやや反動的な傾向となつたこと及び理想と現実とを混同した憾みがあつたこと等が、これらの原因をなしているのではなからうか。

即ち理論的・理想的には航空で勝ちさえすれば問題ないのであるが、現実には32Aが指摘したように未だ一度も成功したことはなく、地上軍の地位は逐次重要性を加えつつあつたことについてやや目を覆つていた感があるように見受けられる。

(b) 中央部において当面の作戦指導に煩わされることなく、これらの問題についてじっくり腰を落ちつけて研究する機隙並びに陣容が必ずしも十分でなかつたことも有力な一因をなしているように考えられる。

(5) 参考所見

陸上戦力と航空戦力(或は陸・海・空戦力)の關係を辨するには当時の情勢において夫々の占める地位を至当に判断し、各々をして所を得しめるような作戦思想を打ち立てることが必要であり、この際特に過去の失敗によつて反動に流れることを戒め、現実と理想を混同することなく、当時の実戦力に應じた地位を与えることが必要ではなからうかと思われる。

又これがためには、中央部において当面の作戦指導に煩わされることなくこれらの問題について冷静・慎重に研究する機隙と陣容を必要とするものと考えられる。

b 天号作戦計画における使用航空兵力と沖縄本島陸上兵力との關係

(1) 天号作戦計画における使用航空予定兵力は約5,000機で天号作戦時に予定された約2,000機を遙かに上回る大兵力であつたが、これに比し陸上兵力は9Dの抽出及びB4Dの派遣中止に伴い天号当時より遙かに少い兵力であり、航空兵力と陸上兵力との均衡がとれていない観があつたように考えられる。

(2) 本件は結果的に陸上兵力過少のため重要飛行場を早期に敵手に委し、反つてわが主戦力たる航空戦力を十分發揮し得ないこととなつた。

(3) このような不均衡を生ずるに至つたのは、当時における海上輸送の困難性並びに本土作戦準備の重視によるものであるが、既述のような大本營の実情把握並びに地上軍の地位をやや軽視した作戦思想に基因する所も尠くないのではないかと觀察される。

(4) 参考所見

某正面の作戦に充當する空・陸の各戦力は均衡のとれたものであることが必要であり、これが均衡を失すれば反つて最も重視する戦力の發揮が著しく拘束されるに至るのではないかと考えられる。

° 84Dの派遣中止後、32Aの現有兵力、北中飛行場の面積及び本土作戦準備との関連において32Aに期待し得る限度

(1) 10HAの期待

84Dの派遣中止後10HAは北・中飛行場地区を強化するため台湾から32M1R8を沖縄に増強することにより、これを契機として44MB8を再び中頭地区に推進するとともに32A主力の飛行場方面に対する攻勢を暗黙裡に期待していた。

但し32M1R8は輸送の関係により、事前に実現するに至らず又44MB8の推進は32Aの同意を得ることが出来ず、なお攻勢についても具体的な調整を行わないうちに作戦実施を迎えるに至った。

(2) 当時32Aに期待し得る限度についての考察

(a) 32M1R8の台湾から沖縄への増強が決定したのは、20年3月中旬であり、4月～5月頃米軍の上陸を予想していた当時としては、たとえ輸送が実現しても殆んど作戦準備を行き余裕なく、これを北・中飛行場地区に増強しても32Aの攻勢の支どうになるような大きな期待はかけ得なかつたのではなからうか。

(b) 又既に島尻地区に集約した44MB8を再び中頭地区に推進することは、32Aの立場及び時期の切迫上無理であり、これらとも関連し北中飛行場地区に対す

る32Aの攻勢を期待することは航空による洋上撃破が余程有利に進展しない限り過望ではなかつたろうかと観察される。

即ち84Dの派遣中止頃における32Aの態勢及び戦力を以てしては、その作戦方針のように島尻地区に対する米軍の空・海基地推進を破挫すること並びに島尻地区特に首里高地帯における有利な地形を活用して本土作戦準備のため数ヶ月の時を獲得することは期待し得たが、中頭地区に対する敵の航空基地推進に対しては遺憾ながら主陣地帯内の長射程砲による妨害を以て甘んぜざるを得ない状態にあつたものと考えられる。

(c) 10HA及び大本営が、本件についてやや過望の期待を有していたことが、作戦開始後32Aの既定方針を根本的に覆えすような要求となつて現われ、32Aの作戦指導を著しく動揺させるに至つたのではないかと観察される。

(8) 10HA及び大本営が32Aに対しやや過望の期待を有するに至つた原因

当時大本営は本土作戦準備及び南西諸島方面については、天号航空作戦準備に忙殺され、又10HAは台湾自体の防衛に精一杯であり、両者とも沖縄陸上作戦の準備に頭を突き込む余裕に乏しい状態であつた。従つて航空作戦については兵棋等によつて相当突き込んだ研究が行われたが、陸上についてはこのような研究は行われていない。

しかしこのことは反面において既述の航空作戦のみをやや過重視した思想の現われとも云えるのであつて、当然空域を総合した兵棋研究等によつて航空作戦と陸上作戦との関係についての具体的研究がなされるべきであり、この点についての事前の詰め方が十分でなかつたことが大きく影響しているのではないかと観察される。

(4) 参考所見

(a) 上級司令部特に最高統帥部は、某正面を担当する兵団の戦力に応じ、これに期待し得る限度を作戦準備段階において兵棋等により予め十分検討の上、作戦指導を行うの要が痛感される。

(b) 作戦思想特に対上陸作戦における陸上戦力と航空戦力との関係について以上のような問題点があつたが、当時統合機構を有しなかつた日本軍としては陸・海軍間の航空作戦の関係を律するだけでも大なる問題があり、又比島決戦で大打撃を受けた航空兵力を本土作戦準備と併行しつつ速急に再建することは正に世紀の大事業であつたものと思われる。

わが陸海中央部がこの間にあつて、時機こそやや遅延したが、5,000機以上の航空兵力を再建して本作戦に投入し、米海軍に最大の損害を強要したことは、偉大な成果であり、ノルマンディー作戦等における独逸軍の微弱なる抵抗と比較すれば思い半ばに過ぎるものがある。

作戦思想等に関する32Aとの調整及び作戦指導

a 9D抽出後における32Aの新作戦構想及び配備に対する10HAの指導（I巻P155及びP161～163参照）

(1) 10HAの指導の実態

(a) 12月上旬、32A参謀長が配備変更についてじ後報告を行った際、10HAとしては内心不満であったが一応これを容認している。（尤もこの場合は44MBは未だ中頭地区にある態勢であった。）

(b) じ後32Aが44MBをも島尻地区に集約し、愈々北・中飛行場の確保が問題になった後においても、5月中旬作戦主任参謀を一回沖縄に派遣して32Aと調整を行ったのみであった。

(c) この場合もやや概念的な論議に終始し北・中飛行場地区に対して攻勢を行うべきか否かの具体的問題についての指導は行わなかつた。又持久期間についても必ずしも大本營の意図に合わない指導が行われているように見受けられる。

(2) 上記についての考察

以上のよう10HAの作戦準備段階における32Aに対する調整指導は必ずしも強力、かつ、具体的に行わ

れなかつた極みがあり、これがため作戦開始後逆に強力な指導を行わざるを得ないようになって32Aの作戦の初動を混乱させるような結果になつたのではなからうかと観察される。

(3) 10HAの指導が強力に行われなかつた原因

10HAとしては9Dを自己の手許に抽出した手前32Aに対して強く云えない立場にあり、又台湾自体の防備に追われていた関係上沖縄の防衛について具体的に研究する余裕がなかつたことが大きく影響しているものと思われる。又当時における方面軍統帥の一般的特色及び32Aを指揮下に入れられた時機が遅かつたので沖縄については大体において32Aに委せる考えが強く、本状況の特質即ち対上陸作戦の性格上航空作戦に関連する事項については、たとえ現地軍の反対があつても作戦準備段階において予め明確にこれを律しておく必要性についての考え方が十分でなかつたのではなからうかと観察される。

(4) 参考所見

作戦準備段階における上級司令部の指導は強力に行うべきであり、特に航空又は海上との協同(統合)作戦に関する事項において然りとする。

然らざれば逆に作戦実施段階において全般作戦の要請

上強引な指導を行わざるを得なくなり、下級兵団との間に反つて思わしくない結果を招来するようになるものと考えられる。

D 9 D 抽出後における 324 の新戦術構想及び配備に関する大本營の実情把握の努力

(1) 大本營の実情把握の実態

9 D 抽出以後においても大本營から比島作戦の指導等の往復に相当数の幕僚が 324 HQ に立寄っているようであるが、本件を主目的とした幕僚の派遣は一度も行われていない。

随つて新陣地の視察等も行われておらず、特に 84 D の派遣中止後は沖縄方面の陸上作戦を専任して担当する幕僚もいないような状態であつた。

当時の作戦課長の回想によつても、「北・中飛行場地区が手薄になつていたことは知つていたが、米軍が上陸する迄これ程大きな穴があいてゐるとは知らなかつた」とあり、当時における大本營の実情把握の程度が端的に窺えるように思われる。

本件は大本營が米軍の上陸第 1 日北・中飛行場の喪失によつて異常な衝撃を受け、遂に攻勢の要求を行うに至つた有力な原因をなしているように観察される。

(2) 大本營の実情把握の努力が十分に行われなかつた原因

当時大本營は比島作戦の指導、次いで本土作戦準備の指導で手一杯であつたこと並びに作戦部長(19年12月)、作戦課長及び主任幕僚(20年2月)の交代等に起因する所大であるが、既述のように航空作戦が極めて

重視された反面、沖縄方面の陸上作戦の地位が、やや軽視された傾向にあつたことも少からず影響しているのではないかと観察される。

(3) 参考所見

上級司令部の作戦準備段階における実情把握の不備は、作戦実施に方り必ずしも下級兵団の実情に即応しない指導となつて現われることに留意を要するものと考えられる。

敵の上陸直後における大本営及び10H Aの32Aに対する攻勢要求特に32Aの実情との関係及び今後の作戦に及ぼした影響(II巻31~33P)

(1) 10H A及び大本営の攻勢要求の動機

10H Aの4月3日における攻勢要求の動機は、8F Dの意見具申もあり、北中飛行場の喪失がわが航空作戦に根本的影響を与えることを憂慮して行われた。

大本営は当初統帥干渉にたることを虞り32Aに対する攻勢要求を差控えていたが、4-3戦況上陸時における積極的作戦指導についての御下問及び海軍側の航空・総攻撃に策応する地上作戦協力の依頼に基き已むなくこれを行りに至っている。

又10H Aは4月4日、32Aが一度攻勢を決意しながら腹背に対する敵船団近接の報により、これを中止したことに對し、航空との関係及び32Aに攻勢への踏み切りをつけさせるために参謀長の依命電により4月8日よりする攻勢を更に要求した。

(2) 上記についての考察

(a) 10H A及び大本営の攻勢要求は、当時における全般作戦上の要請特に航空作戦上の見地を主として考えれば、[時の勢い]として已むに已まれぬものがあつたものと思われる。

特に大本営においては一応これを差控えていたが、御下問の関係及び700機を結集して行う8F(6FA

を含む)の航空総攻撃により敵艦船に相当の戦果を期待し得る状態にもあつたこと等により已むを得ないものがあつたことと推察される。

(b) しかしその反面、沖縄における陸上作戦の実情は、計画段階における予想よりも更に不利な状態になつていたことが看過されていのではないかと思われる点もある。

即ち北中飛行場地区に対する32M150の増強は遂に実現を見るに至らずして同地区における32Aの前進部隊は101Bと飛行場部隊に過ぎなかつたので、敵攻略船団に対する航空部隊を以てする洋上撃破がその展期遅延及び九州沖航空戦による損耗によつて殆んどその成果がなかつたことと相俟つて敵をして無傷のまま上陸せしめ、僅か3日間で中環全地区の海岸線を確保させるに至り、上陸前後の弱点は既に失われていたと謂い得る状態にあつた。

(c) 又一方32Aの現情は、その既定方針により攻勢に対する準備は全然行われて居らず又攻々營々數ヶ月の努力による洞窟桑城によつて彼我の戦力差を埋めることを以て唯一の成算としていた状態にあり、到底攻勢の要求には応じ得ない態勢にあつたと観るべきではなからうか。

(d) 又若し32Aが無準備のまま上級司令部の要求通り乾坤一擲の攻勢を行つて失敗した場合は如何なる結果になるかについての洞察が冷静に行われたかについて問題があるように思われる。サイパンの例に徴しても恐らくその戦力は急速に消耗し、反つて速急に敵の空・海基地建設を許しわが本土に対する侵攻は更に早期に実現される

に至るであろう。この点についてどの程度まで上級司令部で考えられたかは甚だ疑問とする所である。

- (e) 本件は果説したように32Aをして上級司令部の要求と軍の現情との矛盾により非常な苦境に陥らしめ、作戦初動におけるその指導を混乱に導く結果を招来するに至つたように観察される。

- (3) 10HA及び大本營が過望と思われる攻勢要求を行うに至つた原因。

既述攻勢要求の動機において挙げた所によるが、根本的には屢説したように作戦準備段階における現地の実情把握が遺憾ながら十分行われていなかったこと並びに32A側の態度もあつて、事前における思想の調整が不十分のまま作戦実施に突入したことが大きく影響しているものと考えられる。

- (4) 参考所見

10HA及び大本營の作戦思想等に関する32Aとの調整及び作戦指導については以上のような問題点があつたが、既述のように10HA及び大本營ともに作戦開始までは沖縄方面の指導にのみ専念し得ない状態にあり、又相当遠隔の地にあつたため、これとの調整は思うに任

せぬものがあつたものと推察される。

又32A側としても9Dの抽出による打撃等もあつて必ずしも進んで上級司令部の掌握下に入ろうとする積極的態度に出でなかつたので、勢い両者の調整が円滑を欠いたのも無理からぬ面も少なくなく、一概にその不備を批判するのは苛酷の感が多分にあるように思われる。

取扱注意

沖縄作戦の觀察

(主務者第2次案)

第2 32Aの統帥・指揮

取扱注意

目次

1 作戦構想及び配備	2-1
a 10号作戦準備末期における沖縄本島全 集結案特に上級司令部との戦略思想の相違	2-1
b 沖縄本島における捷2号作戦構想及び配備	2-5
c 9Dの抽出に処する状況判断(沖縄本島に おける新作戦計画)	2-10
d 沖縄本島における最終作戦構想及び配備	2-29
e 再三にわたる配備変更が隷下各兵団、部隊 に与えた影響	2-35
f 国頭支隊の用法	2-37
2 作戦構想及び配備に関する司令部内及び上級 司令部との調整	2-40
a 沖縄本島から1=D抽出に対する32A長 の意見具申の内容並びにその方法(台北会議 における32A作戦主任幕僚の活動)	2-40
b 9Dの抽出に伴う新作戦計画策定に方つて の司令部内及び10HAとの事前調整	2-41
c 北・中飛行場地区確保に関する10HAと の論争(根本戦略思想の事前調整)	2-43
d 幕僚調整の限界	2-44
3 作戦指導特に作戦方針との関係	2-45
a 4月3日夜における攻勢の決心	2-45

取扱注意

- d 4月5日の10HA命令に基づく第2次攻勢準備とその中止時に命令を実行し得なかつた原因-----2-48
- c 4月12日における有力な一部を以てする夜襲-----2-49
- d 4月下旬におけるA主力の陸正面転用-----2-52
- e 5月4~5日における攻勢実施-----2-55
- f 後退作戦-----2-58
- 4 戦法の特徴-----2-60
 - a 地下洞窟陣地-----2-60
 - b 敵の上陸前における射撃禁止-----2-60
 - c 橋頭堡灘波射撃-----2-61
 - d 粉戦地帯の作為-----2-61
 - e 長射程砲による飛行場使用の妨害-----2-61
 - f 反斜面陣地-----2-62
 - g 逆上陸-----2-62
 - b 航空支援の重点-敵艦砲の制圧-----2-63
- 5 統御及び幕僚活動並びに将帥・幕僚の性格が作戦に及ぼした影響-----2-65
 - a A長の統御の特徴及びこれが作戦に及ぼした影響-----2-65
 - b 幕僚長及び主要幕僚の性格が作戦に及ぼした影響-----2-67
 - c 司令部内及び32Aと上・下級司令部間の人の和-----2-69

取扱注意

取扱注意

- d 再三にわたる攻勢決心の動搖が降下各兵団
 - a 部隊に与えた影響-----2-69
- e 主要な作戦指導に関する幕僚相互の調整特に幕僚会議-----2-69
- f 幕僚の第1線部隊に対する指導-----2-70
- 5 人事及び兵站支援-----2-72
 - a 兵力の自力増強-----2-72
 - b 主要戦斗における損耗の実態-----2-72
 - c 士気及び規律振作のための処置-----2-73
 - d 作戦方針と軍需品の集積量及びその配分との関係-----2-76
 - e 兵站の作戦に及ぼした影響並びに作戦方針の変更が兵站到及ぼした影響-----2-77
- 7 沖縄陸上作戦の成果-----2-78
 - a 32Aの陸上作戦がわが航空作戦に及ぼした影響-----2-78
 - b 本土作戦準備に及ぼした影響-----2-80
 - c 32Aの作戦計画及び作戦指導の功罪-----2-82

付表 沖縄作戦(米軍上陸時)における日米両軍

- の戦力比較-----2-84
- 付録1 沖縄作戦関係日米両軍地上火力概算表-----2-85
- 付録2 艦砲火力計算-----2-86
- 付録3 航空火力の計算-----2-87

取扱注意

第2 32Aの戦術・指揮

1 作戦構想及び配備

- a 10号作戦準備末期における沖縄本島全力集結案時に上級司令部との戦術思想の相違（I巻P55～56及びP47～48）

(1) 当時における一般情勢

32Aが防衛総軍に本意見具申を開陳したのは19年6月下旬であり、当時サイパン陥落は既に時間の問題と見られる状態にあつたと思われるが、大本營のこれに対処する捷号作戦構想及びその裏付けをなす兩西諸島に対する暫期的兵力増強は未だ計画されていない段階にあつた。一方10号作戦準備計画により4-1新設された32A（2.5B艦隊）の兵力展開は敵潜水艦による遊没等により遅々として進展せず、6月下旬に至るも沖縄及び宮古島は従来から配備されていた要塞部隊等のほか、殆んどガラ空きに近い状態であつた。

(2) 32Aの陸戦重視の思想

以上のような情勢において32Aがその僅かの兵力を沖縄に集結し、せめて同島の確保を期しようとしたことは、地上軍の立場上誠に無理からぬことであり、たしかに陸上作戦の見地からだけ見れば32Aが主張したように各島嶼に至る所所要に充たない兵力を氣休め式に敵

取次注意

取扱注意

配属するより真に敵の攻勢を予想される重要島嶼に兵力を集約した方が有利なことは当然の理である。

しかし10号作戦準備当時の大本營の考え方は、既述の「航空要塞的思想」により、主要島嶼を航空基地化してこれを拠点として絶対国防圏の間隙から、侵入を予想される敵機動部隊の活動を封殺するにあり、未だ本格的な敵の攻勢を予想しない前提における兵力配置であつた。随つてサイパン陥落後、南西諸島に対する本格的な敵の上陸が予想されるに至り7月上旬捷号作戦計画が新たに策定され、同諸島に対する大々の兵力増強によつてこの問題は一応解決されたが、32Aの陸戦を主体とするこの考え方の傾向は以後においても根強く残つていた。

即ちこの思想は、9Dを抽出された後における32Aの新作戦計画策定の際にもその底流をなしており、大本營の航空第1主義とは根本的に相反するものであつて本作戦を通じ32Aと上級司令部との間に紛争を生ずる根本的原因となつた。

(a) 32A特にその作戦幕僚が、大本營側とは異つた戦略思想を抱くに至つた原因。

(a) 直接的には南東及び中部太平洋方面における従来のおが航空作戦の実績に鑑み、32A特にその作戦幕僚がおが航空の実力に対して信頼を失うに至つたこと即ち海洋島嶼作戦において学問的には航空が決戦兵力であるが、既にその実力を失つているので、これを基準として地上作戦を律することは出来ないとの考えを抱くに至つたからである。

取扱注意

取扱注意

この思想は地上軍の立場上一応尤もと考えられ、又結果的には見透しがよかつたとも言える。たしかに当時の航空作戦の実績に鑑み地上作戦の重要性が逐次増大しつあつたとは言え、依然太平洋正面において航空作戦が主役たるの地位にあつたことは変りないと観るべきであり、32Aの考え方はやや極端に走り過ぎていたのではなからうかと観察される。

(b) 32A首脳部(捷号準備以後の発令者を含む)は、何れも内地又は大陸方面から転補された人々であり、対ソを目標としたオーソドックスな大陸作戦については練達之士であつたが、未だ海洋島嶼作戦の経験を積んでいなかつた。又当時内地の学校等においても十分に対米を主体とした戦略・戦術に転換されていない実情にあつた。

而してこれらの人々が着任前に予め大本營の包摂する航空優位の戦略思想について必ずしも徹底した普及指導を受けることなく独断的な判断によつて陸戦を主体とした作戦思想に乗り固つた所に悲劇の因子が包蔵されているように考えられる。

又作戦幕僚の個人的な性格も相当に強く影響しているのではないかと思われる。

(4) 参考所見

(a) 実戦においては、往々にして上下級司令部間におい

取扱注意

て作戦思想の対立を生ずるものであり、その根
略思想の相違は容易に察し得るものではない。

- (b) 上・下級司令部間において根本的な作戦思想につ
て対立を来さないため上級司令部特に最高統帥部にお
いてその抱懐する戦略思想を現地軍等の指揮官幕僚に
対し作戦準備開始前に予め普及徹底させるとともに作
戦準備間あらゆる手段(人事的処置をも含む)を尽し
てその滲透を図ることが必要と考えられる。

取扱注意

取扱注意

b 沖縄本島における捷2号作戦構想及び配備

(i) 地形及び敵情判断(I巻P13~17及びP98)

- (a) 324は敵の予想主上陸正面について海岸の状態・
上陸後の地形・既設飛行場及び飛行場適地・港湾・恒
風等敵の上陸のため必要な諸条件を考慮し、概ね嘉
手納正面・糸満正面・牧港正面の順序にこれを用意し
ていた。

而して嘉手納海岸正面を第1に考えていたことは、
後日見事的中することになったがこれに次ぐ予想上
陸正面として糸満海岸正面をも嘉手納正面と殆んど同
じ位に重視していた点に問題があり、同正面の配備に
相当の兵力を割く結果となつて9D抽出以後の作戦計
画にも少なからぬ影響を与えているように観察される。

(b) 糸満海岸正面の地形の特性

○ リーフの関係

沖縄本島の全海岸は殆んどリーフで圍繞されてい
るが、嘉手納海岸正面においては比較的陸岸に近く(500
m以内)これより逐次南に至るに随いリーフは沖合遠
くに拡がっており、小禄-糸満間の海岸は最も甚しい
状態(海岸より3~4Km)にあつて干潮時には海岸か
ら2Km付近まで徒渉し得る程度であつた。

324はこのようなリーフの状態については米軍の
機械力を以てすれば大なる問題はないとしてあまり考
慮に入れなかつた模様である。(サイパンにおいて米
軍は海岸沖合1Kmにあるリーフを克服して上陸してい

取扱注意

取扱注意

る)

確かに干潮時においても、水陸両用戦車或は装甲人員運搬車等によれば人員の上陸には必ずしも支障はないが、軍需品等の運搬のためには相当の制扼を受け、上陸効程に及ぼす影響は少からぬものがあり、嘉手納海岸正面に比し、この点について相当の遜色があることに留意すべきではなかつたろうか。

○ 海岸を直接制する地形

又糸満海岸正面は海岸から4~500mにこれと併行して防禦に最適な台地が海岸正面に対し上陸を妨害する絶好の防壁を形成しており、比較的開闊した嘉手納海岸正面に比較して上陸行動は相当の困難を伴うことが予想される。

又これらにより大部隊の揚陸に必要な軍需品集積のための地帯も嘉手納正面に比して十分でないように觀察される。

○ 以上のような諸条件によつても、糸満海岸正面に対する敵の主上陸の公算は嘉手納正面に比較すれば当時としても相当少いと判断するのが至当ではなからうか。

(d) 32Aが糸満海岸正面をやや過度に重視するに至つた原因。

米軍の機動力・物質力についての従来の戦訓から推測からぬ面もあつたがややこれが誇張して受け取られた

取扱注意

取扱注意

たこと等により上陸海岸付近における地形の適切な分析検討が、必ずしも十分綿密に行われていなかつた懸みがあるように見受けられる。

又防者特有の心理的弊害による影響も相当あつたのではないかと思われる。

取扱注意

(2) 長所及び短所

(a) 沖縄本島における324の作戦構想は下記諸点特に軍砲兵を以てする橋頭堡殲滅射撃により従来の太平洋諸島嶼における作戦と異り、合理的に必勝の確算を有していた所に大なる特色がある。

- 独特の地形を巧みに利用した洞窟陣地による戦力の温存。
- 綿密な火力計算の基礎の上に立つ軍砲兵による橋頭堡殲滅射撃
- 有利な兵力密度

(b) しかし本構想も次のように実行の可能性について相当の問題があつたのではないかと観察される。

- 敵の上陸正面に随時A主力を機動集中して攻勢を行う計画であつたが、軍砲兵の基本配置は島尻地区にあつたので嘉手納海岸正面に対する機動のためには狭少な中頭・島尻の郡境地帯を通じ9Dのほか軍砲兵をも同時に機動させる必要があり、敵の砲撃時にその交通遮断による影響については必ずしも予断を許さないものがあるように思われる。

本件について324としては夜間の利用により敵の砲・爆は相当に緩和されることと訓練の徹底により一応これを克服し得る見込みを持つていたが、その斉整たる実行の可能性については、なお疑わしいものがあつたように見受けられる。

- 沿岸配備兵団が、他の正面に対する機動予備を

取扱注意

兼ねており、純然たる機動予備は27TKRHのみであつたが、敵の支上陸又は陽動に対処しつつ主上陸正面以外の沿岸配備兵団を随時抽出転用し得るか否か又これに関連し44MBsをA主力方面に使用すべきか否かについて問題があつたと思われる。

取扱注意

取計注意
9 Dの抽出に処する状況判断(神龍本島における新戦
計画) - I巻P 116 ~ P 128

(1) 任務の解釈

(a) 捷2号作戦計画による決戦任務が解消されたか否か
について。

○ 当時32Aはその任務について比島(捷1号)決
戦の発動によつて大本營の捷2号作戦計画は自然消
滅の形となり。また今回9Dも抽出転用されるに至
つたので捷2号計画にもとづく32Aの決戦任務は
本質的に解消されて、目下の所では編成当初与えら
れたし海軍と協同して兩西諸島を防衛すべしとい
う極めて巾の広い基本任務だけが生きていると解釈
していた。

これに反し大本營側は9Dの後詰を考えていた関
係もあり、必ずしも任務に変化はないとの考えを持
つていたようであるが、兩者(10HAを含む)の
間に本件について何等調整が行われなかつた所に最
大の問題がある。

○ 而してこの考え方の相違については、既に大本營
の統帥・指揮の項において考察したように、捷2号
作戦計画の前提条件が大きく崩れた現況において兩
西諸島方面の作戦準備は従来ものを継承するとし
ても当然大本營の新しい作戦構想の下に新たなる性
格をもつて再出発するべきであり、この意味におい
て32Aの考え方は一応妥当であつたと思われる。
しかしこのように重要な基本的問題について上級
司令部の意図を察さなかつたことには大なる問題が

取扱注意

あり、本件については詳細項を改めて考察することとする。

(2) 当時における国軍全般作戦上の要請について

1 当時の全般情況

19年11月下旬において比島(レイテ)決戦は未だ続行中であり、戦況は逐次我れに不利に傾きつつあつたが、大本營は依然航空及び地上兵力を同方面に投入し、決戦の続行を企図していた。

しかし概観すれば、既にレイテ決戦の帰趨は時間の問題の感があり、特に32Aとしては、これが陸路を前提として計画せざるを得ない立場にあつた。

2 兩西諸島方面における次期作戦についての予想

○ 兩西諸島方面における次期作戦が如何なる性格及び規模を以て行われるかについては、当時32Aとしても確たる見透しを樹て得なかつたことは当然であるが、大体において本土を中心とする作戦の一環として戦略持久的性格の作戦を予想していた模様であり、その9Dを抽出された後の現有兵力に立脚すれば妥当な考えであつたと思われる。

○ 又これに関連して大規模な航空兵力等の投入についてはもとより予測し得ないが必ずしもその多くを期待し得ないであろうと考えていたようである。

本件については現にわが航空は比島方面に投入されつつあつたので、これが再建の目途について32Aとして予測し得なかつたことは当然であり、又32Aの従来からの航空に対する不信感が比島方面の実績により益々助長されつつあつた当時として無理からぬことであつたと思われる。

しかし神羅に対する極めて有利なわが航空基地の配置特にそれらがわが本土又はこれに近い位置にある関係上大規模な航空兵力が投入される場合も多分にあることを考慮しておく必要がある。

3 上記の全般作戦的見地から32Aの任務達成上最も重視を要する事項。

○ 32Aは既述のような考え方に基き概ね次の3点を任務達成上特に考慮していたことは一応適切であつたと思われる。

I 9Dと軍砲兵は抽出されたが、現戦力を以て可能の範囲において敵を撃滅(己むを得ざるも出血を強要)

II 敵の空・海基地設定の制約

III 以上により敵の本土進攻を遅延させる。

しかし上記の3要素のうち32Aが最も重視したのは、I項及びIII項であり、具体的には軍砲兵による橋頭堡激射撃を何とか有効に実施し得る戦場を選定するとともに己むを得ざるも長期持久を策すること(即ち地上軍自体による作戦)の主眼とし、敵の空・海基地特に航空基地設定の制約